片翼の鶴の毎日

しおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
片翼の鶴の毎日

【Ｎコード】
Ｎ９９９９Ｙ

【作者名】
しおん

【あらすじ】
『片翼の鶴は、空を翔べるのか？』の番外編です。
主人公がトリップしてくる以前のお話等々…。
本編とは違い、完全なほのぼのを目指しますっ！！

ソラの日常

橋屋（ハシヤ）　空良（ソラ）。１５歳。ごく普通の女子高生。
私の朝は夜明けと共に始まる…。

ＡＭ５：００。
誰よりも早くに目を覚ますと、身なりを整え、孤児院のおばさんとみんなの朝ごはんと自分のお弁当を作る。
おばさんと朝ごはんを作るのは、小さい頃からの私の習慣だ。
最近は、夜帰るのも遅い私は朝のこの時間が楽しみで仕方なかったりする。

「そういえば…、ソラちゃん来週大会なんだって？おちびちゃん達が騒いでたわ。」

「うん。高校行って初めての大会だからドキドキするなぁ～。」

「大丈夫！！ソラちゃんならきっと跳べるわよ！！」

「ありがとう、おばさん！！」

他愛ない雑談を交わした頃には、おじさんと中学生三人組が起きてきた。

「おはよう～ソラ姉。」

「おはよう。悪いけど小学生組起こしてきて！！」

「ラジャー…Ｚ－Ｚ－Ｚ－」

「寝るなぁぁぁっ！！！」

全員を見送った後、最年少の女の子を幼稚園に送った後、ダッシュで高校まで走った。

――――ぶっちゃけ距離はそんなに無いが…時間が無いっ！！！！

こうして…校門が閉まるギリギリに私は学校に着くのだった…。

部活。

「おいっ、橋屋っ！！」

トレーニングの後、顧問に呼び出された。

「お前最近記録が上がってきてるじゃないか。このままだと、来週の新人戦、お前が新記録出すかもな！！」

「いやぁ～、それはないですよ。実際、自己ベストはまだ大会の最高記録に届いてませんから。」

「まあ、とにかく…期待してるからなっ！！」

顧問はそのまま校舎内に入っていった。

――――よしっ！！顧問ああ言ってるし…いっちょ新記録樹立しま

すか！！

空はきもちいいぐらいに澄み渡っていた…。

ＰＭ７：００。

いつもだいたいこの時間に家に着く。

「ただいｍ「「「おかえり、ソラ姉ちゃぁぁぁぁん！！」」」って…グエッ！？」

ドアを開けると同時にタックルをしてきたのは、小学校低学年三人組（おちびちゃん達）。

この三人組は何故かいつも、帰ってくる度にタックルを仕掛ける。

「ハイハイ…重いから…。そしてお姉ちゃん疲れてるから…。」

三人組を半ば引きずりながら、そのまま部屋に行って着替えた。

夕飯の後、課題をして風呂に入る。

風呂上がり、寝る前に柔軟をした後、１０時の消灯に合わせてさっさと寝る。

こうして…私の１日は終わりを告げる…。

「ソラ姉！！花札やろっ！！」

「中学生は早く寝ろっ！！

つか、未成年は博打するなっ！！」

…まだ私の1日は終わらなかった…。

閑話：とある技士の分岐点

王都『マグリマ』より東に１５０キロ。職人の街『アーゼス』の一等地に俺は店を構える。
祖父の代からこの街に住み、我が一族秘伝の補助器具技術を受け継いできた。
そして今。
１３歳になった双子の息子も、この技術を学ぼうと精を出している。

この街には様々な職人が集まる。
中でも特に多いのは俺達のような補助器具職人だ。
この街は隣国『ドルタール王国』から一番近くかつ大きい街だ。
昔から戦争の度にこの街は怪我人や手足を失った者で溢れていた。
その為、この街に職人や医者が集まるようになった。
彼らが再び人生を歩めるようになるまでサポートをするのが、俺達の役目だ。

ある日、店に手紙が届いた。
それは王都『マグリマ』に住む旧友からだ。
手紙の内容は以下の通りだ。

『やあ、ハリー。卒業以来だが元気にしてるかい？
学園で同じ机を並べたサミュエル・ヴェルデだ。あの頃は二人ともまだ若かったなあ。
おっと、今日は同窓会とかのお知らせじゃないんだ。

実は私の末娘が後宮の侍女として入城したんだ。
娘が言うには今王族で一人補助器具職人が必要となった人がいてな。
詳しくは教えてくれなかったんだが、なんでもどこかの姫らしい。
私の記憶が確かなら、君の一族は代々補助器具を扱う家で、君自信もかなり腕が良い。
話は娘を通してつけておいた。
君にはそのことを伝えにこの手紙を送ったんだ。
詳しいことはまた連絡するよ。
それでは☆
君の友人サミュエル・ヴェルデより』

――――何が『それでは☆』だぁぁぁぁぁ！！！
いつもいつもいつも唐突にしかも事後報告って！！オイッ！！
おちゃらけた文面から重要な内容を拾うと、思わず手紙を投げ捨ててしまった。
手紙の主とは昔学園に通っていた頃よくつるんでいた人物の一人だが…うん。大変だった…。
「「父さんコレどうしたの??」」
隣を見ると、双子の息子が勝手に手紙を拾い読んでいた。
「オイッ！！アルセ！！セビア！！手紙を返しなさい！！」

「「やぁだよ～。大事な手紙だから母さんに渡してくる～。」」

「オイッ！？」

息子達はそのまま妻の元まで走り去ってしまった…。

妻は美しく過ぎる我が国の王族が大好きで、他の国から嫁いできた。

そんな妻がこの事実を知ったら…。

――――しばらくは心労が続くな…。

妻の黄色叫びが聞こえるのは、数秒後だった…。

こうして、俺の職人人生で一番大事な日がやってくるのだった…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9999y/

片翼の鶴の毎日

2011年12月16日00時52分発行